

[ゲンロク]

GENROQ

FIRST IMPRESSION

欲望に初試乗。

[新“M”に迫る] **BMW M5**

[最強“E”の造り方] プラバスEV12カブリオレ

[日本上陸!] マセラティ グラントゥーリズモ MCストラダレ

2011
NOV No.309

定価
860Yen

1

IAA DEBUT SPECIAL

秋のデビューラッシュ!

[991型の全容] **新型ポルシェ911カレラ & カレラS**

[待望のデビュー] **フェラーリ458スパイダー**

[遂に公道仕様] ランボルギーニ・ガヤルドLP570-4 スーパートロフェオ・ストラダレ

[SUVコンセプト] マセラティ・クーバン

[もはや芸術品] ブガッティ・ヴェイロン・ロール・ブラン



BATTLE SPECIAL ザ・バトル!

[成熟度の驚異] **ポルシェ911GT3RS4.0 × アウディR8GT**

[強欲の挑戦] ランボルギーニ・ガヤルド・スーパーレジェーラ × ニュルブルクリンク

[話題の新作対決] メルセデス・ベンツC63AMGクーペ × BMW M3クーペ

[意外な共通点] ポルシェ911GT3 × メガーヌ・ルノー・スポール

NEW MODEL IMPRESSION

メルセデス・ベンツMLシリーズ/レンジローバー・イヴォーク/ MINIクーペ 他

THE VINTAGE NOW

タルボット 105

イタリアのレストア術 其の二

GREEN GENROQ

プラバスHP4FE

NEW SERIAL

西川 淳のカーボン学

The Scene

山本太郎 × 道

SHOP REPORT

メルセデス・ベンツ特選ショップ



匠の温度 creative methods

連載 第17回 「“破れざる”和傘

廃業寸前に追い込まれた老舗をひとり立て直し、活躍の場を世界にまで広げた男がいる。飄々と淡々と、生きるその姿に合気道の精神をみた。

TEXT ● 広田雅将 (Masayuki Hirota)
PHOTO ● 長谷良樹 (Yoshiki Hase)



京都市上京区にある日吉屋の店舗兼工房。2階の工房では、特注品の和傘が製造中だった。手前に見えるのは、紙糊祭で使われる和傘。日吉屋では、古い傘の修復も行っている。



和傘造りの道具。左に見えるふたまたの道具は「胴張り」。骨の上に貼った和紙を抑える道具である。2代目から使っているというから、おそらく150年以上前のものだろう。

和

装には欠かせない和傘。明治時代には年1700万本も製造されたが、今や生産数はいくばくもない。全国に10社程度が残るばかりだ。そのひとつが京都市の上京区、人形寺の門前にある。京和傘の老舗、日吉屋である。最盛期には2000軒を数えた京和傘の製造元だが、残っているのは、日吉屋のみとなった。その老舗を率いるのが、現在37歳の西堀耕太郎である。彼は廃業寸前の日吉屋を立て直したのみならず、事業を海外にも展開し大きな成功を収めている。和傘業界では、唯一の成功例だろう。読者の皆さんのなかにも、「老舗ベンチャーの旗手」としてテレビや雑誌に再三取り上げられる彼の姿を、ご覧になった方がいるかもしれない。

西堀耕太郎は、日吉屋の五代目

あたる。老舗の五代目当主と聞けば、誰しも洗練された、柔和な人物を想像するだろう。または老舗ベンチャーの旗手と聞けば、野心満々たる経営者を想像するかもしれない。しかし筆者の前に座った西堀は、そのどちらにも見えなかった。「生まれは和歌山県の新宮市です。妻と知り合つて、家業である和傘屋を継ぎました。つまりは婿養子というわけだ。」「新宮市で公務員として働いていたときに、和傘屋に生まれた妻と知り合いました。日吉屋で和傘を見せられたとき、本当にキレイだと思いましたね。」

和傘に魅せられた彼は、やがて公務員と和傘屋の掛け持ちをはじめた。「金曜までは新宮で公務員、土日は京都で傘造りを学ぶという生活を4年ほど続けました。片道5時間かけて新宮市から京都まで通うんです。そ

れまでプラモデルしか作ったことがなかった、と苦笑する西堀。しかし彼は驚くほどのスピードで、和傘造りの技術を体得していった。「職人の古いノートや他人の手順を見て、傘造りを学びました。技術なんて人から教わるものではないですから、盗みましたよ。製作の様子をビデオで撮り、空いた時間があれば、ビデオを見ながら傘造りを学習したという。妻と結婚して、2004年に日吉屋を継ぎました。でも当時の年商は約100万円ですよ(笑)。跡を継ぐことを、妻にも、妻の実家にも反対されましたね。西堀は、まるで他人事のように、自らの歩みを語る。

和傘の製作には大変な手間がかかる。まず40本から75本の竹骨を銅糸でろくろ(竹骨をまとめるヒンジ)に通し、傘の骨格を作る。続いて裁

西堀耕太郎

Kotaro Nishibori

日吉屋 五代目当主

断した和紙を、竹骨に貼り付けて傘の形に整形していく。貼り付けに使うのは、タビオカを主原料とした自家製の糊である。紙を貼り付けたら、竹骨や柄などを塗装し、天日で乾燥させる。雨傘の場合は、撥水効果を高めるため、亜麻仁油を塗る。乾燥が終わると、骨の内側に「糸飾り」(和傘の内側に張り巡らす糸状の模様)をかかて終わりで。1本作るのに最低でも2週間を要すると言いつから、大変に根気のいる作業だ。手抜きをすれば良さそうなものだが、日吉屋の製法は、材料を含め、江戸時代のそれとまったく同じである。手間を考えれば、和傘造りが廃れたのも理解できなくはない。

傘造りを学び、妻の実家を継いだはいいものの、いきなり和傘が売れるはずもない。しかし西堀には先見の明があった。ウェブサイトを開設し、ネットで和傘を販売しはじめたのである。開設当日に1本売れたというから、潜在需要はあったのだろう。現在日吉屋の売り上げの3割から4割は、ネット経由による。老舗が手がけるネットビジネスの中でも、際だった成功例と言えそうだ。

同時に彼は、和傘業界の現状を知るため全国を飛び回った。「3代目の物産展に出展するときに、近くに傘職人がいないか調べて、見つかればコンタクトを取って、現場を見に行きました。和傘に使うための素材屋も回りましたね。ろくろ(骨を抑える部品)を作る木工所、岐阜県の

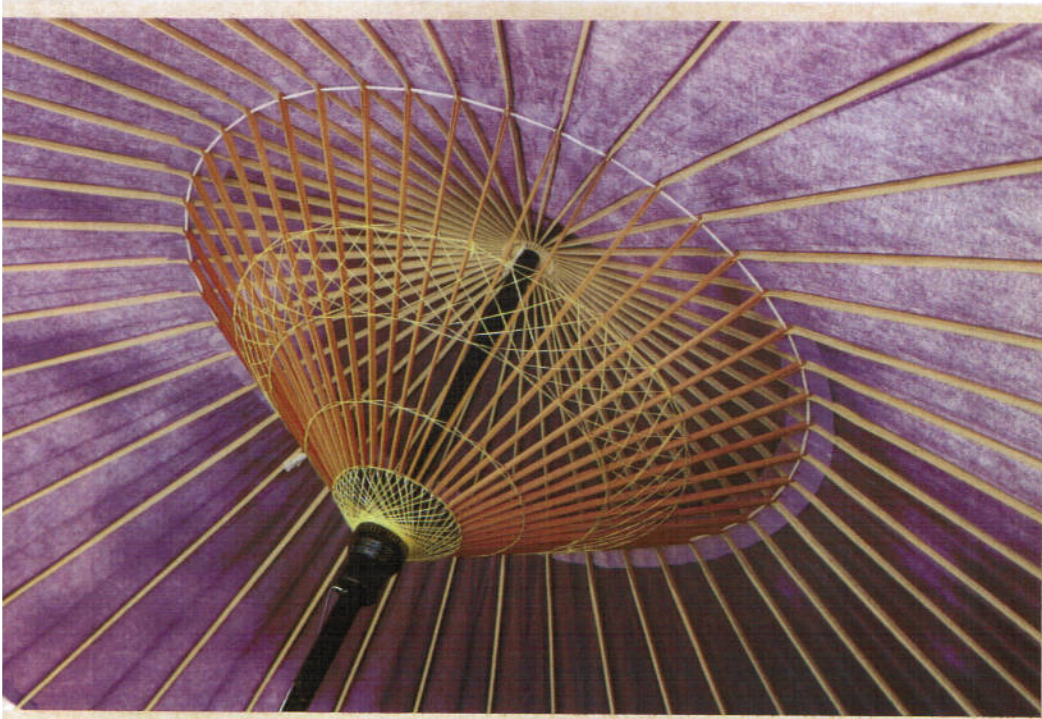
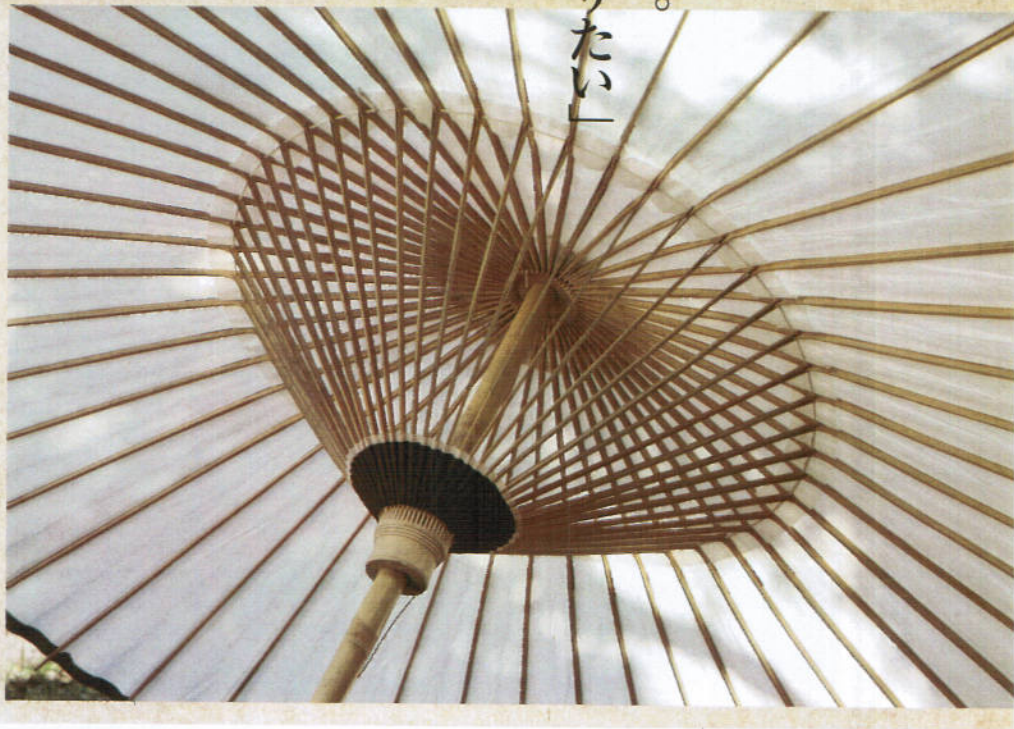


現在日吉屋では、昔ながらの製法に基づき、
三種の和傘を作っている。手前に見える
のは高級な蛇の目傘。奥は定番の番傘。ま
た茶道家元が御用達の、野点傘も製造する。
蛇の目傘・番傘ともに両径は1160mm(1.9
尺)、高さは730mm。価格は2万3400円(蛇
の目傘 中入)、2万6250円(特選番傘)。特
別オーダーも可能だ。



西堀が魅せられた、和傘の内側。見事なまでに幾何学模様である。上は内側に糸かがりが付けられた蛇の目傘。下はシンプルな番傘。複数の竹骨をろくろが支える構造や、その素材は、数百年間ほとんど変わっていない。「千年かけて完成した意匠だから、洗練されています」とは西堀の弁。

「伝統とは革新の連続なのです。後世に残る革新的なものを作りたい」



和紙屋などですね。西堀が作った和傘を、ネットで販売する。日吉屋の経営は持ち直していったが、彼はすでに限界を感じていた。「ネット経由で販売することで、和傘が欲しい人たちの潜在需要は満たせた。でも着物を着る人が増えないと、和傘を使う人は増えません。ではどれぐらいの人が和傘に興味を持つのか。そうたずねたところ、彼は即答した。「1万人にひとりでしょう。京都の人口は200万人だから、200人は買うでしょうね」。

シビアすぎるほど明確な見立てだが、それが彼を日吉屋の多角化に駆

り立てた。和傘の技術を転用した照明器具の作成である。「ヨーロッパのインテリア市場で売れる照明を目指して」異分野のデザイナーたちと協力。以降グッドデザイン賞の受賞をはじめ、世界的な家具見本市である「ミラノサローネ」への出展も果たした。現在日吉屋の製造する照明器具は、世界12カ国で取り扱われているとのこと。なるほど彼は老舗ベンチャーの第一人者に違いない。しかし筆者は、事業展開そのものよりもそれを当然のごとく語る西堀に興味を持った。「日本だけで和傘のビジネスを行うのは無理でしょう、海外

1本の竹から生み出される芸術品

(左上)竹骨を支える(手元)ろくろ。現在製造しているのは、日本で1社のみだ。軽くて粘りのあるチャ材で出来ている(左下)修復中の和傘。紙糊剤用のものである。貼られた和紙をすべてはがし、新しく張り込む作業の最中だった。原型を活かすため、可能な限り当時の部品を用いるとのこと(中)和傘のキモである竹骨。1本の竹からできているため、竹骨を開くと、1本の竹に戻る(右)ろくろに竹骨(親骨と小骨)を取り付けた状態。この上に和紙を貼って、傘の形に整形していく。完成までには数十の製造工程と、2週間もの時間を要する。



への展開は必然ですよ」。

彼の生地である和歌山県は、合気道の祖・植芝盛平の生地である。西堀が育った新宮市には、植芝が命名した合気道の名門道場「熊野塾」があり、合気道を学ぶ留学生が世界中から集まっていた。「実家が英語塾を経営していました。父の知人で地元で英会話を教えていたアメリカ人が、合気道を学びに来ていたんです。彼